

男の案内で三人は干上がった川から一度上がり、森の獣道を進むとその先に小屋が見えた。これまで見たボロ屋とは違ってある程度手入れがされているのか古びてこそいるが崩れそうな印象は抱かれず、三人は僅かに安堵を覚えた。男の案内で小屋に入り、そこで囲める卓もないからと寝台に座る様促された三人に対し男はその対面の壁に立つ。

「日本語が通じる相手で少し安心したよ。俺は坊之威兼輔、N大学の嘉尾研究室の学生さ。お前らは？」

兼輔の気さくな態度は直前の緊迫を和らげるものなことはどことなく英一にも読み取られた。傍らの二人はまだこの男にどう接するべきか決めかねている様子だったので、彼はともかく話をしてみるしかないと思いい口を開いた。

「先程はありがとうございます。俺は逍道学園二年生の葦杜英一と言います。こっちは同じく二年の瀬之川奏美と一年の名賀搗小春です。まあこの辺りじゃ逍道学園なんて言ってもどこだよと思うでしょうけど」

「ああ、ちょっと聞いたことがないな。N大の近辺じゃないなら俺は知らない。教授ならひよつとしたら知ってたりするかもしれないが」

「その教授と云うのは？」

「さっきも言った嘉尾研究室を主宰するN大教授の嘉尾健先生だよ。今はここを留守にしているから直接紹介は出来ないんだが。まー、N大目指してないってならお前ら位の歳じゃ知らなくても不思議はないか」

「いや……すみません」

「謝ることじゃねえさ。ま、お互い何者かが分かったところで、情報の共有を頼みたいんだが」

「えーと……？」

「つまり、お前らがどうしてこの古城の近くに迷い込んだのか知りたいんだよ」

彼は明確に古城と言ったことで英一は少なくとも兼輔が自分よりも長くこの辺りに滞在していてより多くを知っているそうだと感じた。英一は奏美を見る。奏美はまだ若干不安そうな色を示しているが、英一を信じるつもりらしく一つ頷く。それで、英一はこれまでのあらましを掻い摘んで兼輔に語った。意外にも英一たち自身にさえよく分からない理由でここへ迷い込んだことに対し彼は特に疑義を示さなかった。

「そこは俺らも似たようなもんだよ。俺は教授と他の研究室の仲間と共に隣県のG県へ赴いて息抜きのキャンプに出掛けたんだが、その帰りしなにいつの間にか車が得体の知れない霧に包まれてさ。気が付けばここらでもう大体半年じゃないかって教授が……」

「G県？」

「ああ。それがどうかしたのか？」

「あの、すみません。さっき言った、俺たちが合宿に向かったのはA県なんです。俺たちは首都圏からA県に向かったんであって、G県とは全く別の方角の筈です」

「何だって？ 確かにそりゃ妙だな。今まで俺らは他に日本人らしき生存者を見たことがなかったから知り様もなかったが、こいつはどう云うことなんだろう？」

「さあ……？」

二人は付き合わせた情報によって却って疑問が深まるばかりとなったことに揃って首を傾げた。ここは一体どう云う場所なんだ、と英一は頭を抱えたい思いだった。

「あの……」

小春がおずおずと兼輔を見ながら話し掛ける。兼輔は、おつ、と少し嬉しそうに笑顔を見せて応じた。

「どうしたんだい？」

「さっき、『他に日本人らしき生存者を見たことがなかった』って言いましたよね？　それは、外国の方なら見たことがあると云うことですか？」

「そうだ。ただ、みんな話している余裕もなかったか虫の息だった。教授が何とか少しでも話をしようとしたけど、結局大したことは分からないままだったよ」

「そうですか……それじゃその方々も、みんな……」

「全員が全員とは保証しねえが、大方はお陀仏様つてところだ。俺らにはどうしようもなかったよ」沈む三人に兼輔も言えるところなく沈黙が漂った。少し間を置いて奏美が、どこか覚悟した様な顔をして彼にもう一つ質した。

「その、坊之威さん、教授さんはここを留守にしていると行っていましたが、他の研究室の仲間の方は……」

兼輔は直ぐには答えなかった。それで英一や小春にもどこか返って来るであろう答えに察しが付いた。彼は努めて平静な、どこか不愉快な事実を吐き捨てる様に告げた。

「死んだよ。みんな。……だから俺らの知っている限りこの辺りで生き残っているのは教授とお前らの仲間だけになる」

兼輔曰くここは猟師の休憩小屋だったと見られると云う。仕舞われていた弓は弦が切れて役に立たず矢は鏃が錆び羽根も毀れて凡そ使い物にならない程時間が経っていたと云うことである。ただ寝台はボロボロではあったが埃を払えば何とか使える程度には綺麗だったことで教授共々自分たちの荷物を運び込んでここを拠点としていたと云う。あまり多くもない野生動物を狩り、果実が見つければ貴重な糖分として干したりもした。ただそれ以上に彼らにとって重宝したのは誰とも知れぬ者らが遺した遺品であった。

「どうもあの古城一帯には妙なものが転がっていることが一再ならずあって、一度念入りに確かめた筈の場所にまた全く見覚えのないものが落ちていることが結構あったんだよね。その多くは仏さんでもあった訳だが、持ち物には食べられるものも多かった。厳しい生活だったが辛うじてここまで持ち堪えたえれたのはその為だろう」

こんな風に彼が語ると英一たちは実に思い当たる節があって、先の牧場で見つけた食糧を彼に見せてみた。目を丸くした兼輔はそれらを検めた後、多分食えるだろうと小春の判断を支持した。

「ま、そいつは食うならお前らで食つとけ。お前らが見つけたんだからな。……ああ、酒は要らないってんなら貰ってもいいぞ。教授が多分喜ぶだろうからな」

こんな冗談を彼は挟みつつ話はあの黒い男に移った。兼輔は教授共々何度かあれと遭遇したことがあり、全力で逃げてその目を盗む様に物陰に隠れてどうにかやり過ごして来たらしい。

「あいつに力で立ち向かおうと思うな。研究室の仲間の一人がレスリングやってるからって挑み掛かったところたちまち返り討ちにあって俺らの目の前で殺されたんだ。武器があればと掛かった奴もいたが碌な効果もなく捻り殺されちゃった。いいか、絶対にまともにやりあうなよ」

強い調子で彼はそう言い含めた。恐ろしい目に遭った記憶がその脳裏に反芻されているのが三人にも易々と汲み取られた。兼輔は強張った表情で頷く三人に更に続ける。

「……それと他にもやばい奴が幾つかいるから教えておく。あの男は俺らは《黒い人型》と呼んでいるが、同じく黒い毛むくじゃらで八本脚の怪物がいてそいつは《捕食者》、殆ど素っ裸のボロをまとった死体みたいな髪の長い女は《哄笑する女》って呼んでる。どいつもこいつも当たり前のように人を殺しやがる上男と女の方は神出鬼没だから嫌な雰囲気は漂ったらくにかく逃げろ」

「その言い方だと、『捕食者』の方は出て来るのが分かるんでしょうか」

「図体がでかくてな。三つの中では一番小回りが利かず物音も立てやすい。ただ体感じゃ、あいつが一番感覚が鋭くて執拗な気がする」

「はぁ……」

「ま、現実味の欠片も無いバケモンの話をされても、実体験のある分しか身に沁みねえよな。とりあえず得体の知れないモンからは無理に戦おうとするより逃げた方がいい。命あつての物種さ」

兼輔は力なく笑った。それから少し雑談が続いたが、小春がうつらうつらとし始めたのを見た兼輔がそりゃ寝た方がいいと言つて小屋の明かりを消そうとした。そこで英一はスマートフォンを取り出して時刻を確認した。既に午前二時を回ろうとしていた。

「何だそりゃ？」

「え？ スマホでしょう？」

「スマホ……？」

耳慣れない言葉を聞いたと云う様に訝し気にする兼輔を見て英一はそれこそ首を傾げた。今日日スマートフォンを知らない者などほんの幼児ぐらいしかないものではあるまいかと思われたのだが、彼はかつかつと歩み寄つて英一のスマートフォンをしげしげと眺め、やはりよく分からない表情をして溜息を吐いた。

「遺品漁りをして確かに似たようなものを見つけたことはあつた気がするが、食えないし使い方も分からないし、電源入ったらロックされているとか何とかで意味が分からなかったんだが……時計何かか？」

「えーと、電話ですよ。時計機能も付いているしこれでインターネットを使うためのブラウザとかも付いていますし……」

「何だそりゃ、随分便利なもんがこの半年そこの間に出てたもんだな。しかも随分洒落た、それこそスマートな形だよ。ケータイなんてこんな平べったい代物では見たこともなかったぜ？」

「……？」

「……俺にもよく分からねえけど、それで外と云うか、警察とか実家とかに連絡が付く訳じゃねえんだよな？」

「あ、それははい、そうです。電波が届いてなくて」

「まー、それじゃ時計以上の意味は今のところなさそうだな……」

彼は改めて明かりを消すべく歩き出した。兼輔は今日のベッドはお前らに譲るからぐっすり寝ろ、と言い明かりを消すと小屋の戸口を背にして座り込んだ。寝台は二つしかなかったので英一は奏美と小春に譲つて床に雑魚寝をすることにした。二人はそれを悪いと断ろうとしたが、英一はどちらも体力がないことを指摘して少し無理にでも楽に休める場所で休む様説いた。已む無く折れた二人は寝台に上がつて横になる。……ここまでの各人にはそれぞれ幾つとなしに疑問が残るやり取りとなつたもののだが、差し当たり溜まった疲れが三人を急速に眠りへと誘つた。敷かれた布団は薄いとはいえ身を横たえる用には十分だったらしく二人の寝息が聞こえる様になり、英一もぼんやりと意識が休眠して行くのを感じた。

夜が明けて起きた時兼輔は既に朝食として菓子を齧っていた。流石に分けてやれる余裕はない……と云うものだが、彼は室内の一隅に置かれたタンクを指さす。

「東の湖から真水を汲んでな。少しぐらいなら飲んでつてもいい。器があるんだつたら取り過ぎない程度に詰めてもいいぞ。水がないと人間保たないからな」

三人はこの厚意に甘えて喉を潤し、然る後持ってきた保存食から缶詰を三つ開いた。中身は魚肉の油漬けで、オリーブオイルとローレルの香りがうつすら室内に広がる。一本しかないフォークを一人

ずつ食べ終わるまで使い、英一が油も飲み干すのを見て奏美と小春もこれに倣った。油は貴重なカロリーであり体力である以上健康がどうか考える以上に蓄えておかねば先が続かない。差し当たり缶詰の味は大分落ちて美味しいとはお世辞にも言えなかったが、昨日一昨日と菓子で凌いだ身にとっては気にしていられないものだった。三人はそれから当初の目的通り古城を目指すべく干上がった川を北上することにした。兼輔は休む場所が欲しかったら戻って来ていいと告げ三人を見送った。

川の遡上は比較的順調と云えた。目立ったものもなく窪地を歩くだけの時間を三人は周囲へ警戒を怠らぬ様に見回しながら進む。しかしその中でぼつりと奏美が呟いた。

「楚さん、どうしているのかな」

事実昨日の昼以来彼女の姿が見えないこと、由海は本人が持っていた以上の食糧等がないことを思うと危機的であるとは思われなかった。だが無闇に森の中に分け入ったり大声を出したりして、例えばあの黒い男を呼び寄せる様なことにはならない筈もない。英一は半ば気休めの様なことを返すしかなかった。

「あの人はしっかりとっているからきつと無事だよ。もしかしたら誰か他の人と合流しているかもしれないし」

努めて希望的に英一はそう言った。それには小春も微笑んで頷く。これはむしろそう信じたいからこそそんな態度を取るものなのだが、三人とも陰鬱になってはどんどんそれに吞まれると云う恐怖を思い抱いていた。願わくは他の仲間たちも壮健であることをと。

古城の城壁がもう見えて来て、降りたままの跳ね橋も視界に入った。遠目に見てもその橋の先に門があり、扉は開かれたままとなっているのが分かった。本来月子たちと合流するのは正門で、ではあるが内部から向かうなり城壁の上から見下ろして探すなりすることも出来るだろう。三人は少し希望を抱いて干上がった川を上がった。――だしぬけに英一は遠くより物音を聞いた。それは枝の折れる音、葉擦れの音であり彼は立ち止まる。奏美、次いで小春もそれが聞こえたらしく不安げにその音のする方を見た。近付く音は徐々にはつきりしてくる。大きな足音。それは兼輔より警戒を促された《捕食者》のそれであると予見させた。三人は速やかに茂みへと身を潜め、緊迫を自らに感じながら呼吸さえ忘れそうな思いでその木の葉の隙間より現れる者を確かめんと待った。先に飛び出して来た者があった。由海の姿である。恐懼しもつれそうな足を必死に動かして逃げていた。続いて現れたのは、予想通り八本脚の怪物だった。三人は顔を見合わせた。このまま由海を見殺しにすることは出来ない。しかしここで割って入ったところで敵う相手ではない。小春は明らかに動きたがっていないのを感じた。それは半ば見殺しにすることを提案している様なものだったが、己の命と他者を天秤に掛けた時自らのそれを擲ってでも助けに行く者を探す方が難しい。しかし英一は自らがここでそうすることによって背負う罪悪感を一瞬の内に想像し、そのぞっとする後味の悪さに嫌だと思った。彼は小声で言った。

「俺が囫になる。二人はこのまま隠れていろ」

英一は返事を待たずに飛び出した。それを奏美が一瞬止めようとしたが、己が足手まといになることを恐れてその手を引くことが出来ずに俯いた。英一は素早く由海と《捕食者》の間に割って入って彼女に叫んだ。

「俺が引き付けます、早く逃げて！」

由海に返事をする余裕は殆どなかったが、ただ葦杜君とだけ枯れた声で叫んで転びそうになりながら森の内に駆け込んで行った。《捕食者》はこの新顔を品定めする様に僅かに立ち止まった。胴体に細長い首らしきものと頭が続いているが、目や耳は見当たらない。こいつはどうやってこちらを認識しているのだろうかと一瞬思われたがそれに取り合っている時間はあろう筈もなかった。さあ来い、彼はそう虚勢を張って叫びまた駆け出した。

それから英一は必死に逃げた。図体のでかさの割に彼の足から引き離されず執拗に追って来るこの存在に内心悪態を吐きつつも彼は森の中を走り続け、滅茶苦茶に走って走り続けた。――走り続ける最中、彼の視界に時折少女の影がちらついた。その少女はいつもいずこかを指し示し、英一は殆ど疑う余力もなくそれに従って森を走り続けた。辺りが暗み始めた頃、彼は振り返った先にあの怪物の気配を感じられなくなっていることに気付く。多分、撒いた。そう思ったところどつと疲労が雪崩れ込み、彼は近くにあった樹の根元に倒れ込んだ。肺は無尽蔵に酸素を要求しており心臓はひたすらに全身の要求に応えるべく鼓動を続けていた。あの子のお陰だろうか……。この強すぎる疲労感と一旦は危機を脱したことへの安堵から彼は強烈に眠気を感じた。だけど、まだ三人の無事を確かめてない……。そう思えど、体はとても動く様には思われずそのまま意識は暗闇に落ち込んだ。

英一は夢を見ていた。それは幼い頃の夢。初めて月子と出会った時、二人はいがみ合って幼稚園の先生を困らせていたものだった。そんな二人だったがお遊戯で転んで泣いていた月子を見ていたら彼は持っていたハンカチをして擦り傷を作った膝の手当てをしてやったことがあった。月子はどうして、とあどけない口調で問い掛けたものだ。あの時自分は何と答えただろう。彼は夢の内にあってその答えを思い出せなかった。ただ、それから二人は今までのいがみ合いが徐々になくなり、幼稚園を卒園する頃にはすっかり仲良しになっていたものだった。そんな古い夢から更に場面は変わって、公園に二人はいた。ブランコに小さな女の子が独り淋しく座っている。これは奏美と初めて会った時だったと彼は思った。あの彼女を自分は、また月子は放っておけないと思ったのだ。あれは小学校入学を控える三月下旬の土曜日の昼下がりでだった。奏美は最初見知らぬ二人に困惑して口数が少なかったが、英一はあの時男の子らしくボールを持っていたのでキャッチボールをしようと奏美に言った筈である。それは本来月子、或いは他の友達と遊ぶためのものだった。奏美が、あの今に至るまで大人しい女の子がどうしてこれに応える訳があるろう？ 今にして思えばそうとさえ思えるそれを、彼女は思わずと頷いて気乗りしない様子のままに一緒に遊び始めた。途中までは全く盛り上がらず、英一と交代で相手になっている月子もどうしたものかほとほと困り果てていた。英一はキャッチボールを止めて、代わりにかくれんぼをしようと奏美に言った。そこで月子が言ったのだ。もうそろそろうちに帰る時間だと。それを聞いた時の奏美の、途方もなく悲しそうな顔を見て英一は強くもう一度、かくれんぼをしようと繰り返した。月子は驚いたが、英一がこう云う時意地を張る子だと知っていたからか、殊更乗り気になってやろうと彼に続いた。三人は日が暮れて月子の両親が探しに来るまでかくれんぼをして遊んでいた。月子の両親が言ったものだ。この子は？ それに対し英一は躊躇わずに、友達だよと告げた時奏美が彼の顔をじっと見つめて、突然に瞳を潤ませてぐすりぐりと泣き出したのを彼は今でも覚えていた。――奏美の両親はこの日離婚が成立し、母親は構ってやる余裕も無く父親が恋しい娘の意を汲むこともなかった。そう聞いたのはそれから随分経った中学ぐらいの時である。「オオ、甘美ナコト……忌々シイマデニ……」

無粋な声が彼の夢の意識に響いた。その声の主は頭上にいた。一枚の細い目付きと口元をした仮面が空に浮いていた。

「オマエガ抱ク喜ビハコノ城ヲ染メルニ相応シクナイ。シカシオマエノ抱ク絶望ナレバ、サゾ見事ニコノ地ヲ彩ルデアロウ……」

英一は飛び起きた。そこには真つ暗闇が広がっていた。どこだここはと彼は思い、辺りを見回したが何も見えない。半ば直感的に彼は頭上を見上げた。またしても夢の内に見た仮面が見えた。ぶわりと、その仮面が辺りの暗闇を覆い尽くす様に増殖して行く。その中より一つ、ぬつと現れた姿があった。殆ど黒かと思ふ濃紫のローブに身を包んだ仮面の男。よく見ればその手は骸骨のそれであり下半身は見出されなかった。何だこいつは、と彼はぞっとした。

「お前は、何なんだ。誰なんだ！」

「好キニ呼ベバヨイ。ソレヲ全テガ我が名」

「一体ここはどこだ、俺は森の中にいたんじゃないのか!？」

「アア、ソノ不安ナルコトハ面白キ、然レド我ヲ前ニシテ口舌ノ五月蠅キハ望マシクナシ……」

「この野郎……!」

「飛べ。ソシテ更ニモガキ苦シミ、ソノ臓物ニ換エヨ。ソレコソ我がオマエニ望ミ、マタ我が知ルオマエノ唯一ノ道ナルゾ」

「いい加減にしろよ! 言いたいことだけ勝手に言いくさりやがって!」

「……喚クバカリナノモ些カ憐レナリヤ。ナレバ、一ツダケ希望ノ糸ヲ垂ラソウ」

「……は？」

「西ノ城門ヨリ城壁ヲ伝ワバ、東ノ城門ヨリ湖ヘ向カエルデアロウ。サア、行ケ、夢ヨリ目覚メ悪夢ヘ落チヨ……」

得体の知れぬ仮面の骸骨は消え、辺り一帯の仮面も影が引く様に消え去った。英一は途端に頭痛を感じ、のたうち回る。訳の分からない有様に彼は叫んだが、誰かに届くこともなかった。

ぱちぱちと、英一は瞬きをした。周囲は真つ暗だったが、それは夜の闇による暗さであって先程の謎の空間ではないらしいことが目の慣れるにつれ彼には感じられた。英一は地面に転がっていた。僅かに頭痛の跡が残る頭をさすりつつ立ち上がって周囲を窺う。森の中。背後にまで視線を向けると、見覚えのある大穴が開いていた。これはスタート地点に戻されたと云うことか、と彼はがっかりした。「誰かいるのか？」

不意に声がした。英一はその主へと振り向く。明かりが付けられ英一は俄かに眩しさから顔を両腕で庇った。茂みより現れたのはげっそりした様子の京典だった。

「多渋じゃないか。無事だったのか？」

「無事なわけではないですよ。化け物に追い回されたりやつと見つけた甫土先輩が十慧先輩と喧嘩になった挙句別の化け物に襲われて散り散りになったんですから。それに……お腹も空きました」

苛立ちを隠さない様子で京典はそう言った。思えば彼は月子たちにも同行していない者の一人で、自分や月子に付いて行かなかった者たちの動向は知らないままだった。それで彼は知りたいことを尋ねようとしたのだが、京典の反応は刺々しかった。

「そんなことを知ってどうすると云うんです？ みんな自分のことしか考えてませんよ。ぼくが先輩二人に付いて行っていた時も道端の死体から一本のキャンディが見つかったらこれをどうするって揉めに揉めて結局甫土先輩が空腹に負けてこっそり食べてしまったんですからね」

「いやでも、少しでも他の皆のことを知っておけば何か出来ることがあるかもしれないし」

「あるもんですか。このままぼくらはここで飢え死にするか、あの化け物共に殺されるしかないんだ」

彼はそこまで言っただけで座り込んだ。疲れた表情をする京典に英一は、もしかしたら皆で寄り集まってバスの前で食べた時以来何も食べていないのかもしれないと思った。

「なあ。よければこれ、食べてもいいよ」

英一は仲間たちと分け合った缶詰の残り一つが鞆に残っていたので、頭の中では僅かに逡巡を覚えながらもこれを取り出して差し出した。京典は怪訝な顔をした。それが何なのかすぐには判別しかねたと云うのもあるが、そもそも脈絡がない様にも思われたのである。

「何ですかそれ。食べていいって、ぼくの機嫌でも取ってるつもりなんですか」

「腹が減ってるだろうなと思ってさ。食器が無いけど、とりあえず少しぐらいは腹が膨れると思う」

「いや要りま……いや……あ、あ、そもそもそれ何ですか。どこでそんなもの拾ったんですか」

「ああ、西の方に牧場らしきところがあって、そこでたまたま見つけたんだけど」

「たまたまって……」

「古いものみたいだったから美味しいかは保障しないけどさ、でも腹減らしてたらそれこそ動けないだろ」

「だったら先輩が自分で食べた方がいいんじゃないですか」

「俺はまあ……何とか別のを探すよ。こんなんでも多渋の先輩な訳だし」

「……」

分からないと云う顔をしていた京典に英一はその足元へ缶詰を置き、立ち去ろうとする。

「どこへ行くんですか」

「奏美と名賀搗さん、それに楚さんとはぐれちゃったからな。探しに行く」

「こは……名賀搗さんは無事なんですか？」

その一言は妙に熱がこもっている様に思われたが、英一は何故だろうと思いつつもそれを質すことはしなかった。ただ彼の問いかけに答える。

「八本脚の化け物に見つかったりしていなければ多分な。俺はそいつから皆を逃がす為に囨になって逃げて来た。それで気が付いたらこの辺りに戻って来てしまってたんだよ」

「……」

「付いて来る元気は……なさそうだな。じゃ、一つ教えておく。この先を北北西ぐらに進み続けると干上がった川がある。それをさらに北上して半ばを過ぎた辺りだと思うけど、近くに小屋があるんだ。そこなら多分腰を落ち着ける。あ、もし着いたら中を勝手に物色するなよ」

「……はい？」

「他の生存者と会って話をしたんだ。それで、そこを寝床として使っていいってさ」

英一が去った後、京典は足元の缶詰に視線を落とした。彼と英一は話題があまり合わなかったことから接点が乏しく、その上下関係は疎遠と云うところだった。それでも平素ならわざわざ事を荒立てる様な物言いをする筈もなかったものだが、京典は空腹と心身の疲労に自分がすっかり参っていたことを改めて自覚せざるを得なかった。責任を引き受けて女子たちの為に戦っている彼をこうも無碍にしてこの上その施しをのうのうと受け取るのは実に恥であるかにも思われたが、しかし腹の虫が鳴ったのを聞くと彼のちんけなプライドもいい加減かなぐり捨てられた。そう長い間食べ物らしい食べ物を口にしなかった訳ではない筈なのに、彼が食べた缶詰の味は落ちていたにもかかわらずひどく美味に思われたのだった。

英一は敢えて開けた場所を避けつつあの干上がった川を目指した。この夜闇の中で万が一またあの《黒い人型》や《捕食者》の如きと遭遇してはいよいよ無事では済むまいと考えずにはおかれなかった。まだしも隠れる茂みの近いところの方が多少足の踏み場が少なくとも安全だろう。この様な判断に基づき、深夜の移動を続けた。本当は寝るべきかとも思われたが、兼輔から寝てもいい場所を提供されている以上出来ればその辺の固い地面に寝転がりたくはなかったのである。英一はそうしてまた干上がった川を見つけ、その視線は慎重に辺りを見回した。何かいるか、誰かいるか。……その視線は闇の中に佇む者に停まった。不意に遠雷が鳴り響き、俄か雨が降り出す。少しして再び雷が鳴り、雷光が辺りを一瞬照らし出した。佇む者の姿は游次郎の後ろ姿である様に見えた。英一は僅かに安堵して、茂みから出てその背中に近寄った。

「あのー……もしかして、正雁先輩ですか？」

この呼び掛けに相手はすぐには応えなかった。英一は微かに不審に思いつつも歩みを止めず、その背中の手前まで近付いた。その時、首がこちらを向いた。明らかに大概の人間に可能な角度を超えてその顔は回り、英一を見た。その瞬間にまた雷が辺りを照らした。游次郎らしきその顔はどろどろに溶けて原形を保っていなかった。眼窩も口も、鼻も。――英一はわずかに後ずさった。すると、その

足が誰かにぶつかる。高まる鼓動を感じながら英一がまた振り返った先には自分自身そっくりの男が立っていた。顔だけが全く崩れに崩れた自分が。二人の異形は英一を掴んだ。その力に英一は抗いきれない。徐々に肉を締め上げる力に彼は呻いた。そして恐怖した。化け物に。

「葦杜、しっかりしろ！」

突然に游次郎の声が響き、目の前にいた化け物の游次郎が何かに横殴りにされた。ボン、と音を立ててその頭が割れ、黒い何かが薙ぎ倒される体から弾け飛ぶ。英一は後ろの英一もどきに羽交い絞めにされていたが、それで僅かに正気を取り戻した彼は足を引っ掛けて相手の姿勢を崩した。そこから素早く転がって辛うじてその拘束を免れたところ、暗夜の雷雨を縫う様に游次郎が角材を振りかぶって英一もどきへとこれを叩き付けた。胴体をしたたかに打ち付けたそれからやはり黒い何かが染み出し、痙攣と共に英一もどきは動かなくなった。……英一は尚も心臓がばくばくと音を立てていたが、この場に現れた相手が自分の見知った先輩であること確かめると漸く気持ちが落ち着きを取り戻し始めた。

「た、助かりました、正雁先輩」

「葦杜……すぐこの場を離れるぞ。付いて来い」

「え？」

「すぐにそいつから化け物が生まれる！ 急げ！」

見ればぐじゅぐじゅと音を立てて二つの異形から何かが形成され直そうとしていた。英一は先頭を走る游次郎に続いて走り、森の中に駆け込んだ。

「あれは何なんですか！？」

「知らん！ 今は振り切ることだけを考えろ！」

こんなものに夜になっても追い回されて、朝はいつになるんだと英一は一瞬取り留めもないことを考えたがそれを不満として垂らしている場合ではなかった。二人は遠くから迫る気配をどこか感じながらも森の中をしゃにむに走り続けた。そうして早朝になり辺りが微かに明るくなり始める頃、ようやく逃げ隠れを止めてもよさそうだと游次郎が判断した。しかしこれでまた現在地がよく分からなくなった感じだと英一は些か困った心境になった。それはそれとして、游次郎は命の恩人だとも思っただが。

「ありがとうございます、正雁先輩」

「礼はいい。お前、瀬之川と名賀搦、それに楚はどうした？」

こう問われると一通り京典に話したことを同様のことを話す必要があった。游次郎は軽く相槌を打ちながら聞いた。

「そう云うことなら何とか三人とも生きていると思っておくべきか。それに多洪も」

「あいつ、大丈夫でしょうか？」

「お前が焼いた世話の分は生き延びる確率が上がるだろう。……これだけ聞かせて貰ったんなら俺のことも話しておくべきか」

游次郎は皆が夜闇の内に散り散りになる中で已む無く最初月子たちの方へ付いて行こうとしたのだが、突然に謎の仮面をした骸骨に立ちはだかれ意識を失った。起きた時には古城正門手前にあり、周囲に誰もいないことを確認した彼はこの正門を通って城内へ入れるか調べたものの巨大な門はびくともせず、併設されていた勝手口も鍵が掛かっていて開けられるものではなかった。已む無く彼は東側を指指そうとしたが今度は森の中で異様な姿をした死体の様な女を見てしまい、本能的に隠れてこれをやり過ごしたがその存在が徘徊する限り東側へ進むことは不可能に思われた。それで西の探索に向かったのだがそこで夜に由海と遭遇したものの彼女はひどく怯え、自分を化け物と罵って走り去ってしまったことで彼は何か不穏なものがあることを知った。彼は森の中を探索し、まさに自分そっくりの化け物がと相対して一度はこれを倒したが直ぐに何か別のものに再生され不吉から彼は逃げる



他なかった。暫く森を彷徨さまよい、後は息を整えてこの牧場に辿り着いたところだったと云う次第らしい。

仮面をした骸骨と聞いて英一は驚いた。あれはただの悪い夢ではなかったらしい。英一は意を決して自分は見たが京典に話した時には省略した、あの紫のローブをまとう仮面の骸骨の話をした。

「驚いたな……俺の見間違いでは済まなかったと云う訳か」

「あいつが何なのかは分かりませんが、俺たちに害意があることは間違いないと思います」

「だな。しかしこの話、他の連中に会った時にするべきかどうか」

「……幾ら化け物がうろうろしていると云っても突拍子もないことですからしない方がいいと思います。ただ、月子になら……話してもいいかもしれない」

「何故？」

「あいつは俺がそう言ったと聞いたなら多分信じてくれるから……って、こんな理由にもなりませんよね」

英一は自分で言っただけでその月子に対する信頼の吐露に些か羞恥を覚えたのだが、游次郎は特にこれからかうこともせず一つ頷いた。

「分かった。仮に会えたら話しておこう」

「え、ああ……はい。お願いします。ところで、これからどうしましょう？」

「お前は他の生存者の使っていると云う小屋へ戻って瀬之川たちの安否を確かめろ。それが終わったら霧海たちと合流するんだ」

「はい。ええと、それじゃみんなと合流出来たら森を抜けて――」

「いや、森は未だに訳の分からん化け物があちこち徘徊していると考えると大所帯で進むのは危険だろう。お前、夢の中であの仮面野郎に城壁を伝えと言われたんだったな？」

「え、ああ、そうですね……でも信じて良いのかどうか」

「眉唾なのは違いないが、分かり切ったリスクを背負って道さえ分からん森を抜けるよりどう動けばいいか分かり易そうな方へ進む方が少なくとも生きて湖まで到達出来る確率は高いと思う」

「うーん……分かりました。じゃあ正雁先輩は？」

「俺は当初の考え通り東の湖へ向かって霧海たちとの合流を図る。心配するな、単独行動にはいい加減慣れているからな」

つまり伝言役をも引き受けようと云うのだ。この頼もしい先輩がかくも沈着なことを英一は驚嘆せずにはおられない。どこからその理性と精神力が培われ、今なおそれが揺らがぬままにこの場にいられるのだろうか？

「でも大丈夫でしょうか。多分結構な距離がありますし、その角材も重そうだし」

「だが無いよりは余程いい武器だ。森の中に崩れた廃屋があって丁度良かったから引っこ抜いて来たが正解だった」

英一はふと思いついて鞆を探った。そこには拳銃がきちんと収まっていた。他の二人はこれを持つことを望まなかった為に彼が持ち歩いていたのだ。

「先輩、これ」

「……どこでこんなものを？」

「持ち主のいなくなった自動車のトランクに入っていました。先輩、アメリカで銃の使い方を習ったんですよね？」

「まあ……な。親父のお節介がこんなところで役に立つ日が来るとはな……」

游次郎は丁重にその拳銃を受け取り、型や構造を検めて弾倉を取り出し残弾を確認した。六発の弾を確認した彼は弾倉を戻しその銃を懷に仕舞った。

「この角材はお前にやる。ちゃんと瀬之川たちが生きていたらそれなりの人数だ、尋常を超した化け物共には役に立つまいがさっきの様なから身を守るのには十分だろう」

「あ……あ、結構重いですね」

「それなりに太いからな。あとついでにこれも持って行け」

そう言っただけはガムを取り出した。四枚ばかり入っている。

「いいんですか？」

「大丈夫だ。弔われもしない死人の使い残しを色々拾えてあるからすぐに飢え死にする様なことにはならない」

「分かりました。大事に使わせて頂きます」

「ああ。いいか葦杜、死ぬなよ。俺たちが生きてここから帰れるかは正直怪しいと思っただけいるが、最低限どうしようもないことを確かめない限り諦めるな」

その正直さ、その上にある生きる意思を見た英一は、やはりこの人は尊敬すべき人なんだと改めて彼に感謝と共に敬意を抱いた。二人はそうして再び分かれた。英一は重い角材を抱えながらも急がねばならぬと森を駆けた。